

山口県立山口図書館開設 120 周年・建築 50 周年記念 「見る・聴く・考える 山口県の図書館建築」講演資料 2



第 3 部 記念講演 山口県立山口図書館と建築家・鬼頭梓

鬼頭梓(1926～2008 年)は東京生まれ。1950 年東京帝国大学建築学科卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。1964 年独立後、東京経済大学図書館(1968 年)、日野市立中央図書館(1973 年)、山口県立山口図書館(1973 年)、洲本市立洲本図書館(1998 年)など、全国各地に 30 を超える図書館を手掛け、民主主義時代に相応しい開架式の閲覧室を持つ戦後型図書館建築のパイオニアとして大きな足跡を残した。

本講演では、鬼頭の図書館建築作品を振り返りながら、これからの公共図書館の在り方について考える。

講師：松隈 洋 氏

神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授。

1957 年兵庫県生まれ。1980 年京都大学工学部建築学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000 年 4 月京都工芸繊維大学助教授。2008 年 10 月同教授、2023 年 4 月から現職。

工学博士(東京大学)。専門は近代建築史、建築設計論。主な著書に、『建築の前夜 前川國男論』、『ル・コルビュジエから遠く離れて』、『モダニズム建築紀行』、『ルイス・カーン』、『近代建築を記憶する』、『坂倉準三とはだれか』、『建築家・坂倉準三「輝く都市」をめざして』、『残すべき建築』、『前川國男現代との対話』(編著)、『建築家・前川國男の仕事』(共編著)、『建築家大高正人の仕事』(共著)、『日本建築様式史』(共著)など。

「生誕 100 年・前川國男建築展」(2005 年)事務局長、「文化遺産としてのモダニズム建築—DOCOMOMO20 選」展(2000 年)と「同 100 選」展(2005 年)のキュレーションの他に、A・レーモンド、坂倉準三、C・ペリアン、白井晟一、丹下健三、村野藤吾、谷口吉郎・谷口吉生、吉村順三、大高正人、増田友也、山本忠司、浦辺鎮太郎、瀧光夫、鬼頭梓など、多くの建築展の企画に携わる。DOCOMOMO Japan 代表(2013 年 5 月～2018 年 9 月)。文化庁国立近現代建築資料館運営委員(2013 年 4 月～2020 年 3 月)。同志社大学兼任講師(2009 年 4 月～2012 年 3 月、2018 年 4 月～2021 年 3 月)、京都芸術大学非常勤講師(2011 年～)。2019 年に著書の『建築の前夜 前川國男論』により日本建築学会賞(論文)受賞。





鬼頭 梓 1926～2008 年

鬼頭 梓 略歴

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1926 年 1 月 15 日 | 東京都・吉祥寺に生まれる |
| 1950 年 3 月 | 東京大学第一工学部建築学科卒業 |
| 4 月 | 前川國男建築設計事務所入所 |
| 1964 年 5 月 | 同退所 |
| 6 月 | 鬼頭梓建築設計事務所を開設 |
| 1992～96 年 | 日本建築家協会 (JIA) 会長 |
| 2007 年 4 月 | 法人を解散、個人事務所として登録 |
| 2008 年 8 月 20 日 | 逝去 享年 82 歳 |

■鬼頭 梓の言葉

- ①「建築家はさまざまな条件を与えられて自動的に答を出し手ゆく人工頭脳ではありません。一つの建物を通して社会に働きかけ、そこに共感を呼び起し、そのことによって社会に対して責任を持つ、いわば文化の担い手である以上、あるいは建築をただ造型とのみ考えて、使い方から離れた所で形を求めたり、あるいは単によりよい社会を夢想し、今の現実にあってはなすべきを知らないというようなことは、到底許されないことでありましょう。」
「労働する手・生活する意欲への共感」『新建築』1956年10月号
- ②「開放的につくられたこのプランは、現実の風に当って管理上さまざまな思いがけない問題に当たった。(中略)が、喜んだのは子供たちである。(中略)恰好の遊び場、探検場となった。プレキャストの階段手すりはすべり台だし、石垣はロッククライミングの岩場、上ったり下ったりあちこちに手をのぼしたこの建物は、想像力のたくましい子供たちにとって、大人の予想もしない遊び場となるのだ。そしてある日、目に余って館長が一人の子供に注意したとき、彼はわるびれもせずこう答えた。“だっておじさん、これは区民会館だろう？皆の税金でたてた皆の建物じゃないか！”と。この子供たちが大人になったとき、始めて都市のコアとかコミュニティセンターとかいう言葉が、ようやく内容をもってくるのではないだろうか。」
「世田谷区民会館を設計して」『新建築』1959年7月号
- ③「親しみやすい空間を創りたい。(中略)大きなもの、立派なもの、美しいもの、それらは私たち建築家が誰でも求めてやまないものだ。だがかつて、それらが権力の象徴であったことも忘れることはできない。大きいこと、立派なこと、美しいことが悪いのではないことはいうまでもない。問題はもっと異なった側面にある。それは“誰のための建物か”という点から出発する。何度も言い古された言葉だけれども、私たちの、市民の、あるいは民衆の、という言葉は、改めてまた何度でも唱えられなくてはならないだろう。それらの言葉が、本当にその実体を得て、最早あたりまえの言葉になってしまうまで。」
『建築文化』1961年5月号
- ④「ここには、ひとりひとりの人間の、時にやりきれないような日々の生活や、あるいは飛び上がりたいほどの喜びなどを、託すものがない。ただ一人だまって坐り、あるいは激しくあるいは静かに祈ろうとする人間にとって、このカテドラルは無縁の空間であった。丹下さんの作品は、人間のマッサに対するとき、いつも比類のない空間を創り出す。だが一人に対しては非情であった。(中略)これは教会ではないと思う。(中略)現代の技術が創り出したこの新しい空間に深い敬意をはらいながら、私はやはりこれは違うと思う。」
「わたくしの疑問 東京カテドラルの印象」『国際建築』1965年8月号
- ⑤「私はできるだけ機能的な図書館をつくりたいと思った。 図書館らしい図書館を、研究室らしい研究室をつくりたい と思った。といて典型を求めたのではない。ここの条件の中でしかできないものをつくりたいと思ったのである。そして同時に私の願いは既存の校舎と新しい建築によって、この構内に大学のキャンパスと呼ぶにふさわしい静かな環境をつくることであった。」
「基本構想」『新建築』1968年8月号
- ⑥「移動図書館に同乗して行った時、私の見た光景は感動的だった。(中略)それはあの、新鮮な野菜を満載してやってくる八百屋のトラックと、そこに集まってくる奥さんたちの姿とまったく同じ光景だった。(中略)それはいかにも日常的な光景だったし、図書館は市民にとってなくてはならぬもの、あるのが当り前の存在だった。青空の下で、この小さな広場に繰り広げられた本の市場には、あの図書館に入る時に背中に吹きこんでくるよそよそしさなどはどこにもなかった。私たちはこの光景に感動し、この生き生きとした日常の光景を、建築に移しかえる方法を、いったい私たちは持っているのだろうか...。」 「土地と人と建築と」『新建築』1973年8月号

- ⑦「建築は今、普通の市民にとって、何の必要もないのに建てられる。どこに必要なのか分からないままに建てられる。ほかにもっと必要なものがあるのに、もっともっと欲しいものがあるのに、と人は思う。だが何ということか、あの私たちとは無縁に見える建築が、実は私たちの必要に応じて、その要求の上に建てられているのだとは。そのからくりを私は恐ろしいと思う。
(中略)それだけに日野の図書館の活動とその歴史とは、改めて驚異なのだ。本当の公共施設が、本当に公共と呼び得るものが、日本の社会に今ようやく根をおろそうとしている。」 同上
- ⑧「初めてこの敷地を見、周辺の町を歩きまわった時から、私はここに建つ建物の中に、通り抜けの露地をつくりたいと思うようになった。(中略) 東側の古い町並みからこの敷地に通じている袋小路を通して、人びとが敷地をよぎってゆくのを見た。それは決してそんなに多くの人数だった訳ではない。が、正面西側の、県庁へ通ずる道に面したよそゆきのたたずまいに比して、この露地からひっそりと通り抜けてよぎってゆく人びとの姿には日常の生活があった。(中略) この日常の光景が、もし新しい建物の中にひき移されるならば、どんなに素晴らしいだろう」
「設計メモ」『新建築』1973年11月号
- ⑨「私たちの意図は、この入口から直結した広場のようなスペースに、この図書館のもっとも中心的な機能としてのレファレンスを置いたことにあった。重要な中心的機能のスペースを、(中略) もっとも開放的な広場の中に展開したのである。これが私たちのこのプログラムに対する理解であり、(中略) 万人に共有のシステムとしての現代の図書館の本当の意味を、ここで具体的に確かめてみたいと思ったのである。」「共有のシステムとしての図書館」『新建築』1976年7月号
- ⑩「私にとって美術館の建築は経験のない世界だったし、経験がないということは判断の基準を持たないのに等しかった。(中略) そんな中で前川先生を訪ねて教を乞うた時、いわれた言葉は今も忘れない。「物(館蔵品)はあるのか? 人(学芸員)はいるのか? それならば何も教えることはない。その物と人に聞くことだ。私は物も人もいない美術館の設計にいつも苦労して来たのだ」と。私は目を覚まされる思いがした。」
「山口県立美術館が生まれるまで」『新建築』1980年1月号
- ⑪「図書館は本の場所である。(中略) 現代の図書館は開架制による運営が常識である。私たちはそれによって誰でも直接自由に本に接し、自分で本を探し、自分でその内容を確認しながら本を選ぶことができるようになった。これは図書館の歴史の中で、革命的といってよいほどに画期的な変革であったが、同時に、そこでは人々が自分の欲しい本を探すだけでなく、逆に本が人々に語りかけてくるという、本から人への働きかけも生まれたのである。(中略) 何の定った目的もなく、ただ漫然と本の間を歩きながら、目にとまったものをとりあげて頁をめくり、ひろい読みをしてまた歩きまわっている中に、私たちは時にそこから思いもかけない新しい世界、今まではまったく知らなかった未知の世界を発見することがある。このような本と人との出会い、本と人との交流は、近代社会において図書館が獲得した輝かしい成果であったし、その出会いと交流の場所こそが今の私たちの図書館なのである。そんな空間を創ることは、一つは確かに家具の仕事である。(中略) とくに机と椅子は、そこに小さな一人だけの宇宙をつくる大切な道具なのである。
(中略) 皆の場所としての本の場所が、そのまま一人一人の自分の場所でもあるという、そんな皆と私との関係が当り前のことになった時に、図書館は初めて新しい空間を手に入れることができるのである。」
「私の図書館建築作法」『図書館建築作品集』1984年
- ⑫「工場跡地を利用することはプログラムで決まっていました。どこまで残すかはこちらの判断です。のこぎり屋根の工場がありました、ひどく傷んでいました。床は抜けているし、雨は漏っていた。本当に廃墟でした。(中略) 実施設計までの間に、残したり壊したりを相談しましたね。(中略) 現場での判断が大切なんだけれど、佐田君ががんばって、ずっと常駐してね。新しく中庭をつくりました。(中略) つくってみればみんないいと言ってくれるけれど、改修前を見ていないからね。やっぱり大変です。」 『建築家の自由 鬼頭梓と図書館建築』建築ジャーナル 2008年

- ⑬「私にとって、現代の図書館のもつ意味は、民主主義そのもののもつ意味とほとんど重なりあっていた。民主主義はまだ生きている、いやもしかするとこれから生まれてくるかもしれない、生み出すことができるかもしれないのだというかすかな希望を、私は現代の図書館から教わった。密室から解放され、権力と権威による独占を排して万人のものとなろうとする知識は、その新しい展開の場所を求めた。それは(中略)身近で平明で開放的な空間でなくてはならなかったし、(中略)活動的な場でなくてはならなかった。いまもなお闘いは続けられているのであり、日本ではいまようやく始まったばかりなのである。」 「図書館建築雑感」『建築文化』1976年7月号

■前川恒雄(1930~2020年)の言葉 2016年

「現在、図書費は減り、非正規職員は増え、図書館の前には委託という大きな壁が立ちはだかっている。この壁は、「公共」としてあるべき政府・自治体の責任を民間に転嫁する方針の一環であり、図書館員の倫理、使命感、成長を阻害し、運営の責任があいまいになり、委託先の都合が優先される。これによって国民が将来にわたって享受すべき文化を骨抜きにしてしまうものである。(中略)公共図書館の任務は、憲法を市民生活の中で現実のものとするためにある。」

「日野市立図書館がめざしたもの」

『本之力 図書館の力を信じて—日野市立図書館開設 50周年記念誌—』

■鬼頭 梓展 2023年開催までの経緯と鬼頭さんとの一期一会

1983年 前川國男作品集の出版へ向けた所内の研究会の席で出会う。

1993年 神奈川県立音楽堂の誌上座談会で同席する。『建築ジャーナル』1993年8月号

1998年 鬼頭 梓の建築批評を執筆。内井昭蔵編『モダニズム建築の軌跡』INAX出版 2000年所収

2002年 アーキフォーラム「図書館建築に託したもの」講演を依頼する。

*この時、事務所の閉鎖と設計原図の処分予定を鬼頭から聞き、東京理科大学の山名善之研究室に緊急避難を依頼し、整理が進められる。

2005年 生誕100年・前川國男建築展の実行委員会で協働する。

2006年 同建築展の弘前巡回展の催して同席する。

2008年 鬼頭 梓『建築家の自由』の長時間インタビューに加わる。

2009年 設計原図類が、遺族から金沢工業大学に寄贈される。

2016年 夏葉社の島田潤一郎さんが、前川恒雄『移動図書館ひまわり号』を復刊

2021年 ゼミ生の平尾良樹と金沢工業大学に図面調査に赴き、展覧会準備のために借用する。

2022年 鬼頭 梓展を立案し、関係諸機関への協力依頼を進める。

2023年「建築家・鬼頭 梓の切り拓いた戦後図書館の地平」展の開催

*平尾良樹『鬼頭梓と図書館建築の戦後史』京都工芸繊維大学修士論文 2023年

■参考文献

- ・鬼頭 梓『建築家の自由—鬼頭 梓と図書館建築』建築ジャーナル社 2008年
- ・鬼頭 梓建築設計事務所企画・編集・発行『図書館建築作品集』1984年
- ・図書館計画施設研究所編集・発行『私の図書館建築作法—鬼頭 梓図書館建築論集』1989年
- ・前川恒雄『われらの図書館』筑摩書房 1987年
- ・前川恒雄『移動図書館ひまわり号』筑摩書房 1988年／夏葉社 2016年【復刊】
- ・前川恒雄『未来の図書館のために』夏葉社 2021年※未入手。前川恒雄の自伝本で入手困難
- ・石井 敦・前川恒雄『図書館の発見—市民の新しい権利』NHK ブックス 1973年
- ・図書館問題研究会編『改訂新版 図説 図書館のすべて』ほるぷ社 1985年
- ・東條文規『図書館の近代—私論・図書館はこうして大きくなった』ポット出版 1999年
- ・東條文規『図書館という軌跡』ポット出版 2009年
- ・東條文規『図書館にドン・キホーテがいた頃』ポット出版プラス 2021年
- ・福嶋 聡『書店と民主主義』人文書院 2016年
- ・中村文孝・小田光雄『私たちが図書館について知っている二、三の事柄』論創社 2022年
- ・西河内靖泰『知をひらく—「図書館の自由」を求めて』青灯社 2011年
- ・清水正三編『昭和史の発掘 戦争と図書館』白石書店 1977年
- ・松本 剛『略奪した文化—戦争と図書』岩波書店 1993年
- ・R・オヴェンデン『攻撃される知識の歴史—なぜ図書館とアーカイブは破壊され続けるのか』柏書房 2022年
- ・ベンジャミン・R・バーバー『〈私たち〉の場所—消費社会から市民社会をとりもどす』慶應大学出版会 2007年

建築家・鬼頭梓（一九二六～二〇〇八年）が亡くなって四年が経つ。私事ながら、生前にさまざまな形で接する機会があり、縁あって氏の建築を巡り歩いて批評文を記したり、晩年にはインタビューする時間もいただいた。そんな中から、鬼頭が数多く手がけた図書館こそ、建築が公共的な使命を果たすことのできる一つの試金石となる空間であるとの思いを強くした。なぜ図書館なのか。私たちは、日常生活の中に当り前のようにある図書館という存在のありがたさを感じることは少ないのかもしれない。しかし、誰もが自由に開架書棚を閲覧し、館外へ借り出すこともできる図書館は戦前にはなかった。それは、戦争に負担した戦前の図書館への反省から、戦後、民主主義を育てるために、進駐軍が推し進めた図書館改革によって、はじめてこの国へもたらされたものなのである。また、だからこそ、日本図書館協会が定めた「図書館の自由に関する宣言」には、次のような図書館の任務が今も掲げられている。

「すべての国民は、いつでもその必要とする資料を入手し利用する権利を有する。この権利を社会的に保障することは、すなわち知る自由を保障することである。図書館は、まさにこのことに責任を負う機関である。（中略）わが国においては、図書館が国民の知る自由を保障するのではなく、国民に対する「思想善導」の機関として、国民の知る自由を妨げる役割さえ果たした歴史的事実があることを忘れてはならない。図書館は、この反省の上に、国民の知る自由を守り、ひろげていく責任を果たすことが必要である。」

このような戦後精神に支えられて誕生した図書館の歩みに沿うかのように、鬼頭の仕事

は重ねられていく。前川國男建築設計事務所時代に担当した「神奈川県立図書館・音楽堂」（一九五四年）にはじまり、「国立国会図書館」（一九六二年）を経て、独立後の実質的なデビュ作となる「東京経済大学図書館」（一九六八年）から「函館市立図書館」（二〇〇五年）に至るまで、その数は三〇を超える。今回、そうした一連の図書館の中から紹介したいのは、戦後のな公共図書館の記念碑とも言われる「日野市立中央図書館」（一九七三年）である。この四月、十四年ぶ

記憶の建築 松隈 洋

日野市立中央図書館 1973年
図書館に込めた戦後精神の形



東側の崖下から図書館を見上げる



中庭に面した1階開架室

までも控え目で寡黙な表情だ。小さな玄関から中に入ると、そこには、大きな吹き抜けのある開架室とオリジナルの子供サイズのかわいらしい閲覧机と椅子が並ぶ児童室が、L型に中庭を取り囲んで広がる。どこにも特異なデザインは施されていないし、ごくごく当たり前の空間があるだけだ。けれども、そこには、何か確信のような考え方が隅々にまで込められており、かえってそのことが人々の日常的な本との交流を自然なものとしているようにも思える。この建物が竣工した際、鬼頭

りに訪れる機会があった。

JR中央線の豊田駅から徒歩で現地近くと、のどかだった周囲の田園地帯は区画整理が進んで急速に宅地化し、前面道路も拡幅されて、風景は変じていた。しかし、図書館は同じ姿で変わらずにそこにあった。また、激しく雨の降る最悪の天候にもかかわらず、多くの市民が静かに本と向き合っており、それぞれの時間を過ごしている。延床面積約二千二百坪の図書館は今では小ぶりな建物であり、焼き過ぎレンガの積まれた外観もどこ

は、「日野市立図書館の活動とその歴史とは、私にとってひとつの驚異であった」（『新建築』一九七三年八月号）と記している。彼は何に驚いたのだろうか。

日野の図書館は、一九六五年、一台の車による移動図書館からスタートする。その活動の中心には、イギリスの図書館の視察経験を経て日野市に招かれ、「本当の図書館」を日本でも実現させようとした館長の前川恒雄がいた。彼は、建物がない中で、まず人々の身近な場所に図書運び届けることから始めよ

う、と発想を転換したのである。そして、次に本に親しむようになった人々の要求に応じてあちこちの建物に間借りをした後、最初につくられたのは払い下げを受けた都電の車両を改造した児童図書館だった。このような地道で精力的な図書館活動を踏まえて、満を持して建設が計画されたのが、この中央図書館なのである。前川館長は、鬼頭の手がけた「東京経済大学図書館」を見て、この人しかいないと直感したという。そして、「中央図書館の設計方針」として、「新しい図書館建築の道標となる図書館」、「親しみやすく、入りやすい図書館」、「歳月を経るほど美しくなる図書館」といった目標を掲げる。これを受け取った鬼頭は、移動図書館に乗り込み、眼にした光景を次のように記すのである。

「青空の下で、この小さな広場に繰り広げられた本の市場には、あの図書館に入る時にすつと背中に吹きこんでくるよそよそさなどはどこにもなかった。私はこの光景に感動し、しかしやがてそれはある困惑に変わって行った。この光景を、この生き生きとした日常の光景を、建築に移しかえる方法を、いったい私たちは持つているだろうか……」

こうして、鬼頭は、「前川館長の意図を、その細部にわたって忠実に実現しよう」と努力した。そのみがこの生き生きとした活動に欠かせない方法であった。とも記している。前川恒雄の思いと長い闘い、鬼頭梓の感動と謙虚な設計姿勢があつて、この図書館は誕生する。その空間に流れる心地よい緊張感、そここそ由来するのだと思う。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教員、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。

今秋十月初旬、十八年ぶりに山口市に立ち寄り、鬼頭梓（一九二六―二〇〇八年）の初期の代表作である山口県立図書館を再訪する機会があった。私事ながら、前回は、「モダニズムの軌跡」という建築情報誌の連載企画で、各地に残る鬼頭の設計した建築物を訪ね歩いて批評文を記せ、という身に余る重責の執筆依頼を受けての訪問だった（INAX REPORT No.136、一九九八年。後に『モダニズム建築の軌跡』INAX出版、二〇〇〇年に収録）。大雨降りしきる悪天候の中、一人駆け足での見学だったため、周囲の環境や歴史に触れる余裕はなかった。今回は、秋晴れにも恵まれ、道先案内を、宇部市にある村野藤吾の旧・宇部銀行本店（一九三九年竣工、現・ヒストリア宇部）の保存活用の指定管理者として活躍する県庁の元職員河野哲男さんにお願したので、桜並木と並んで有名な清流の坂川や山陽と山陰を結ぶ重要な街道であった秩父還に残る古い町並み、国宝瑞瑠光寺のある香山公園や旧・山口県庁舎（現・県政資料館）など、この図書館を取り囲む豊かな自然と歴史の一端をたどることができた。

こうして再訪した図書館は、大切に使用されており、近年に改修も施されたのだろう。竣工から四三年の歳月をまったく感じさせない生き生きとした空間が、ごく自然な普段使いの姿で、変わらずそこにあった。吹き抜けの中央ホールを中心にして、周囲に手を差し出すような形で、大きなポリウレムの書庫棟や事務室棟、レクチャールームや研修棟などが伸び、そこに、東西両方向から自由に通り抜けられる通路が設けられている。トップライトから自然光が降り注ぎ、その下で本を読む人が輝いて見える。スロープを二階に上ると、視線の先に周囲

の山々の緑が見える中、明るい開架の本棚とあちこちで本を読む人びとが、濃とした空気の中に溶け込んでいる。奇跡のような光景が広がっていた。鬼頭は、この図書館で何を実現させようとしたのだろうか。竣工時の文章に、次の記述が残されている。

「初めてこの敷地を見、周辺の町を歩きまわった時から、私はここに建つ建物の中に、通り抜けの露地をつくりたいと思うようになった。（中略）この広い敷地に立つ

記憶の建築

松隈 洋

山口県立図書館 1973年
人びとの生活と共にある図書館



南西側の正面アプローチ



中央ホールを見下ろす

たとき、敷地の東側の古い町並みからこの敷地に通じている袋小路を通って、人びとが敷地をよぎってゆくのをみた。それは決してそんなに多くの人々だった訳ではない。が、正面西側の、県庁へ通ずる道に面したよそゆきのたたずまいに比して、この露地からひっそりと通り抜けてよぎってゆく人びとの姿には日常の生活があった。（中略）この日常の光景が、もし新しい建物の中にひき移されるならば、どんなに素晴らしくいだろう」（鬼頭梓「設計メモ」『新建築』

一九七三年十一月号）

今回の再訪で、この言葉の意味を改めて実感することができた。鬼頭は、東側に広がる閑静な住宅地と、県庁へ通ずる西側の大きな街路とに挟まれた敷地の特性を見つめつつ、図書館に通り抜けの露地を設けることによって、人びとの日常の生活に本を読む空間を馴染ませようとしたのだ。続く文章には、次のような言葉も記されている。

「この古い歴史と美しい自然に囲まれた山口の町へきて、ひっそりと敷地を通り抜けてゆく人びとの光景に接している中に、今私にここで何ができるのかと重い焦燥感におそわれたことは事実だし、それは今も続いている。（中略）エトランジェである私に、この古い家並みのたたずまいの中にひそむ歴史と、人間の営みや葛藤を知ることとはできない。ただ歩きまわり、立ち止り、ひたすらに見て歩いてゆく中で、だからこ

ものを大切にしてゆきたい、この町と自然と、そこに繰り広げられている人びとの生活とに、邪魔にならないものをつくりたい、と思いはじめたのである。」

「エトランジェ」（異邦人）に過ぎない自分に何ができるのか、と自問しつつ、鬼頭は、人びとの営みを見つめる中から、図書館の在り方を原理的に考えようとしたのである。そして、この文章を読むとき、そこに、こうした鬼頭の観察者としての眼を育んだのが、同じ年に竣工した東京の日野市立中央図書館の設計を始めるにあたって出会った図書館活動だったことが見えてくる。館長の前川恒雄に求められ、バスを改造した移動図書館ひまわり号に乗り込んだ鬼頭は、その光景を次のように書き留めていた。

「移動図書館に同乗して行った時、私の見た光景は感動的だった。（中略）青空の下で、この小さな広場に繰り広げられた本の市場には、あの図書館に入る時にすっと背中中に吹き込んでくるよそよそしさなどはどこにもなかった。（中略）この光景を、この生き生きとした日常の光景を、建築に移しかえる方法を、いったい私たちは持っているのだろうか。」（鬼頭梓「土地と人と建築」と「新建築」一九七三年八月号）

鬼頭が求めたのは、目の前に展開される日常の生き生きとした光景を建築に移しかえる方法を見つめることだったのだ。図書館という公共空間の今を考えるためにも、その眼差しを忘れずにいたいと思う。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川勇建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。

建築が幸福な形で誕生し、長く親しまれるために必要な条件とは何なのだろうか。今年十月、鬼頭梓が手がけた図書館と共に、対面にある山口県立美術館を再訪する機会があり、適切なメンテナンスが施されて竣工時の清新さを湛える空間に魅せられながら、そのことについて考えさせられた。

山口県立図書館の竣工から二年後の一九七五年、鬼頭梓は、同じ山口県から美術館設計の打診を受ける。鬼頭は、図書館を手がけたものの、もともと山口とは無縁の人間であり、設計者として選ばれたために提出する必要がある指名願いも出していなかったという。そんな中、「美術館建設の予定があり、設計者を選択する段階にあるが、仕事のやりくりがつきそうならば経歴書を送ってほしい」と山口県の建築課長から突然の電話を受けたのである。その後、順調に話は進み、鬼頭は設計を手がけることになる。建物の竣工後、鬼頭は感慨を込めて次のような文章を書き残している。

「山口県は希有のクライアントであった。でき上った建築の良し悪しは別として、そこには良い建築が生れるために必要な条件はすべて揃っていた。ひとりの建築家とその事務所とが、情熱をそそぎ精魂を傾けて仕事に打ち込むことのできる場所が整っていたのである。いや、否応なく私たちをそのようにひき込んでゆくものがあつたといったほうがよい。(中略)設計が開始されるために必要な県側の準備は、文化課と建築課の手でほとんど完璧といってよい程になされていた。美術館の運営方針は周到な検討を経て確定しており、その内容は具体的に説得力を持って居た。それに基づき規模その他の建築的要求も十分煮つまつ

ていたし、美術館建築に関する膨大な資料も集められていた。そこには長年にわたる準備の積み重ねの歴史があつたのである。」(鬼頭梓「山口県立美術館が生まれるまで」『新建築』一九八〇年一月号)

鬼頭がこう記したのも無理はない。そこには、「地方文化の育成」に最大の重点を置くという確固たる運営方針があり、すでに常設展示室の核となる収蔵品として、過酷な抑留経験をもとに「シベリアシリーズ」

記憶の建築

松隈 洋

山口県立美術館 1979年
伸びやかに広がる内外空間の妙味



南東の前面広場から見る外観



萩焼の陶壁のある吹抜けのロビー

聞き、本を読み、資料をあさってみても、その多様な見解や異なる主張は、そのそれぞれに何がしかの根拠があつて、それゆえにますます分からなくなつてゆく始末であつた。(中略)そんな中で前川先生を訪ねて教えを乞うた時、いわれた言葉は今も忘れない。「物(館蔵品)はあるのか?人学芸員)はいるのか?それならば何も教えることはない。その物と人に聞くことだ。私は物もなく人もいない美術館の設計にいつも苦勞して来たのだ」と。私は目を覚ま

と呼ばれる名作を描き続けた画家・香月泰

男の作品群が確定されていた。また、学芸員の中核となる人材も企画段階から計画立案にかかわつていたのである。それでも鬼頭には不安に思うことがあつたという。同じ文章に、次のような言葉も綴られている。

「私にとって美術館の建築は経験のない世界だったし、経験がないに等しかった。主断の基準を持たないのに等しかった。主

れる思いがした。」

鬼頭は良き師を持つていたものだと思う。また事務所の先輩格の高正人から、「問題は沢山抱え込めば込むほどよい、そして悩んだだけ建築は深くなる」と教えられたことも忘れてはいなかった。こうして鬼頭

は、「物と人に聞くこと」に徹して、学芸員や建築課の人びとと打合せを繰り返して、生前のままの状態を残されていた香月泰男のアトリエや萩焼の窯元を訪ね歩いたという。

敷地として与えられたのは、県庁へと続く主要道路と小高い丘陵に挟まれた南北に細長い山口大学の移転跡地だった。幸いにも、敷地の北側は美術館の建設に併せて都市公園として整備されることになった。そこで、鬼頭は、西側の丘陵の緑を背景に、建物を常設と企画の複数の展示室と収蔵庫や講堂を小気味よく分散配置させながら、中央の正面奥に二層吹抜けのロビーを確保し、その外側に広がる芝生の屋外展示場の庭園へと続く伸びやかな空間構成を試みたのである。巧みなのは、前面広場に面する建物の二階に常設展示室を設け、その下にピロティを置くことで、正面外観に寡黙な表情と陰影を与えつつ、エントランスホールから奥のロビーへ、さらに庭園へと続く空間のダイナミックな展開が意図されていることだ。同時に、エントランスホールからロビーを経てそれぞれの展示室へと至るアプローチを、すべて緩やかな斜路とすることによって、庭園のまぶしい緑が飛び込む大らかな空間を味わいながら、ゆつたりとした気持ちで美術に接する雰囲気をつくりあげている。また、展示室の間にはトツブライトから自然光を取り入れることによって、空間にリズムミカルな変化も与えられている。そして、「広く透明な山口の空」と歴史を前にして、外壁に特注の煉瓦を積み、時間に耐える凛とした穏やかな表情を付与したのである。ここを訪れて感じるのは、鬼頭が山口の人と土地に出会い、深く対話した喜びのような透明感だ。それは、この美術館がこれからも親しまれながらそこに在り続ける原動力となるに違いない。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授。博士(工学)。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。

二〇二〇年二月十五日、東北大学で「公共性と美術館の未来」と題する緊急シンポジウムが開催され、ゲストコメンテーターとして議論に加わる機会があった。これは、人文社会学系の教員で組織された日本学国際共同大学院の主催によるものだったが、このテーマには、前年の十一月に、突如、前川國男の設計した宮城県美術館（一九八一年）を県民会館と共に別の場所に移転・統合する県の計画が発表され、美術館の行方が危ぶまれる事態に対する教員有志の切実な問いかけが託されていた。なぜなら、東北大学の広大な川内キャンパスと宮城県美術館の敷地は隣接しており、そこには、長い時間をかけて守り育てられてきた文教地区の良質な環境が存在するからである。

市民の動きに連動する彼らの動きは早かった。代表の野家啓一を中心に、森一郎、尾関彰宏、芳賀満、五十嵐太郎ら、哲学や美術史、考古学や建築史の研究者が発起人となり、その呼びかけに応じた約一五〇名に及ぶ教員有志の会によって、一月二十七日に、知事宛の「宮城県美術館の移転計画中止を求める要望書」が提出された。

こうして迎えたシンポジウムには約一八〇人が参加し、四時間半にわたって議論が交わされ、会場からも熱心な発言が続いた。また、前川の下でこの美術館の設計を担当し、前川没後に西側に増築された佐藤忠良記念館（一九九〇年）の設計も手がけた大宇根弘司氏も東京から駆けつけ、学芸員と共同で作りを上げた前川美術館の到達点であると強調していた。卑近ながら、建設中の一九八〇年に事務所に入所した筆者は、前川と大宇根氏の製図室でのやり取りを目撃している。温かな雰囲気にも包まれたシンポジウム会場で、竣工から約四〇年、この美

術館が地元深く根づき、かけがえのない存在となっていることを改めて実感した。さて、このシンポジウムの会場となった講義棟のすぐ北隣に建つのが、宮城県美術館のできる九年前の一九七二年に竣工した鬼頭梓（一九二六〜二〇〇八年）の東北大学附属図書館である。今回は、わずかな時間だったが、一九九八年以来、実に二十二年ぶりに立ち寄り、懐かしく鬼頭さんのことを思い出していた。前回は、ある広報誌の依頼で、鬼頭さんの建築を各地に巡り、

記憶の建築

松隈 洋

東北大学附属図書館 1972年
知識への畏敬に満ちた空間



南東側から見た建物全景



エントランスホールからの眺め

この要件を満たすべく、鬼頭は何を試みようとしたのだろうか。竣工から三年半が過ぎた時点で記された文章の中で、彼は、設計の意図を次のように説明している。「私たちの意図は、この入口から直結した広場のようなスペースに、この図書館のもっとも中心的な機能としてのレファレンスを置いたことにあった。重要な中心的機能のスペースを、幾重にも壁を隔てた奥に置くのではなく、もっとも開放的な広場

その特質を文章にまとめた際の視察である。こうして、久方ぶりに建物の前に立つと、戦後型の図書館建築の姿を切り拓いた生前の鬼頭さんの面影が蘇ってくる。

この大学附属図書館に求められたのは、学部学生のための学習図書館と、院生や教員など研究者のための研究図書館を明確に分離しながら、それらに共通して求められるレファレンスサービス（情報検索支援）の機能を図書館の中央に配置する、というものだった。限られた厳しいコストの下で、

の中に展開したのである。これが私たちのこのプログラムに対する理解であり、（中略）同時に、万人に共有のシステムとしての現代の図書館の本来の意味を、ここで具体的に確かめてみたいと思つたのである。（鬼頭梓「共有のシステムとしての図書館」『新建築』一九七六年七月号）

そして、続く文章の中で、戦後型の現代図書館に託されたものについて、鬼頭は、次のように記したのである。

「かつて知識が独占されてきたことに対して、あるいは、アカデミズムの閉鎖社会が、長い間象牙の塔の中に守り続けてきた学問と知識との権威に対して、現代の図書館は、知識を万人に共有の財産として、それを白日のものに置こうとする。その平明で開放的な意味を、改めて確かめてみたいと思つた。現代図書館の発展の歴史は、本当には私たちが知り得ないできた歴史の転換の上に立っている、と私は思う。」

寡黙な表情の正面玄関から中に入り、エントランスホールに立つと、その先には、幅二十一m、奥行き六〇m、天井高七mの広々とした巨大な空間が奥へと続いている。かつて蔵書目録カードのケースが並んでいた手前のカタログホールには、パソコンがずらりと並び、奥のレファレンスコーナーは、ボックスシートが置かれたワーキングエリアとして使われており、様相を大きく変えていた。けれども、そこには、鬼頭の追い求めたとおり、力強いコンクリート打放しの骨格によって形づくられた「大きな空間それ自身が、静かなたたずまいの中に、知識への畏敬とでも言った気分のみたされる、そのような空間」が、圧倒的な存在感をもって、今も変わらずに息づいていた。同じ文章末尾の、家具と外構の設計は「余儀なく私たちの手を離れた。その意味でこれは私たちにあって未完の建築である」という言葉に無念さも読み取れるが、知識への畏敬に満ちたその空間は、今回のシンポジウムとも確かな形で響き合っていた。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九九七年兵庫県生まれ、一九八〇年京都市立大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。

もうこれで見納めになるのだろうか。今年の二月下旬、前川國男の戦後の代表作の一つである東京の世田谷区民会館・区庁舎を久方ぶりに訪ねた。続く三月に発表された「世田谷区本庁舎整備実施設計概要」によれば、二〇二〇年度中に工事施工者を選定し、解体工事に着手する予定だという。しかし、最新の区公報の情報によれば、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急対応で、施工者選定のための入札公告は見送られ、その行方が注目される事態になっている。実は、解体工事に先立ち、区民会館で六〇年営業を続けてきたレストラン「けやき」の三月末閉店を知り、その姿も見届かれないと思ひ立ち、立ち寄ったのである。

渋谷駅から東急田園都市線に乗車して五分、三軒茶屋で降り、住宅街の中を二両編成で走る路面電車の世田谷線に乗り換えて、五分で松陰神社前に到着する。駅前の小さな商店街と住宅街を抜けると視界が開け、櫻並木の向こうに水平の大庇を持つ区民会館と奥の公会堂、右手に五階建ての区庁舎からなる一群の建物が見えてくる。冬枯れの櫻並木は寒々しく、建物も必ずしも健全な状態に保たれてきたとは言えず、あちこちに傷みが見られたものの、都内では珍しい低層の区庁舎と公会堂が中庭を囲む落ち着いたたたずまいとコンクリート打放しの力強い表情は変わらずそこにあった。

区民会館と区庁舎が一体となったこの建物は、一九五七年に都内の区としては初の指名コンペで建設された。指名されたのは、日建設計、佐藤武夫、山下寿郎、前川國男の四者であり、建築関係の審査員は、今井兼次、岸田日出刀、武藤清、谷口吉郎が務めた。求められたのは、約一三〇〇席の公会堂、集会室・図書館・結婚式場・食堂等

からなる区民会館と区庁舎である。審査の結果、前川案が選ばれ、二期にわたって建設された。それから六〇年が経つ。

その間、保存活用が解体新築をめぐる幅広い議論が十五年以上も続けられてきた。背景には、この建物の落ち着いたたたずまいと、住宅地に溶け込む好ましいスケール感によって育まれてきた風景への愛着があったのだと思う。こうして、日本建築家協会世田谷地域会と市民有志によって、作家の林望や映画監督の篠田正浩らを迎えた

記憶の建築

松隈 洋

世田谷区民会館・区庁舎 1959・60年
戦後に育まれた都市の広場の行方



中庭から見る区庁舎（左）と区民会館



区庁舎中央の玄関ホール。壁画デザインは大沢昌助。

し、残る区民会館と区庁舎の八割をすべて取り壊し、現在の約三倍の規模となる延床面積約三万九千㎡、地上二〇階、高さ約四五mの新庁舎を建設する決定を下したのである。おそらく、住宅街の閑静な環境には過剰な今回の改築によって、程よい建物のスケール感も失われ、中庭の雰囲気も損なわれてしまうだろう。良い方向に計画は修正できないものだろうか。前川の下で設計チーフを務めた鬼頭梓（一九二六～二〇〇八年）が竣工時に記した次の文章に、この

建物に込められた思いが読み取れる。

「親しみやすい空間を創りたい。ちようど四年前、はじめてこの設計に手をつけた時、最初に思ったことであつた。（中略）大きなもの、立派なもの、美しいもの、それらは私たち建築家が誰でも求めてやまないものだ。だが曾て、それらが権力の象徴であつたことも忘れることはできない。大きいこと、立派なこと、美しいことが悪いのではないことはいままでもない。問題はもっと

異なった側面にある。それは、誰のための建物か。という点から出発する。（中略）建築は必ずその外にも内にも空間を創り出す。大切なことは建築そのものではなくて、この空間だということ。建築は空間を創るためにあるのだということ。そして、空間は人間のためにあるのだということ。その人間こそ私たちであり、市民であり、民衆であるのだということ。（「平地計画のことなど」「建築文化」一九六一年五月号）

続いて、鬼頭は、この建物の設計方法について、次のように記したのである。

「前面道路から裏側の道路まで連なる広場、その中途におかれたピロティの右に庁舎、左に区民会館の入口という配置は、いわば、道路に囲まれた広場の一隅にホワイエ、一隅に役所のカウンターをおくといった気持だった。（中略）道路がひろがり、ふくれあがり、のびていって広場となり、また道路へと連なっていく。二つの建物とピロティによってつくられ、櫻と灌木に囲まれ、ベンチのおかれたその広場を、人々は通り抜け、吹き溜りのようにあちこちに溜り、子供は遊びまわる。区役所や区民会館に来る人たちと、直接関係のないこんなことが、いかにも大切なことにおもえてくるのである。」

何も付け加えることはない。身近な生活環境を見直そうとする意識も高まりつつある中で、今一度、この戦後に育まれた都市の広場の価値が見直されてほしい。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）
一九五七年兵庫生まれ、一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所、二〇〇八年十月より現職。

90年の時を刻んだ白亜の新建築

木村産業研究所 一九三二年

文・写真 松隈 洋 [京都工芸繊維大学教授]

二〇二二年八月二日、青森県弘前市の木村産業研究所が国の重要文化財に指定された。前川國男（一九〇五～八六年）の建物としては初の重文指定となる。この研究所は、一九三〇年四月、ル・コルビュジェのバリのアトリエでの二年間の修業を終えて帰国した前川が、その翌年から設計に着手し、一九三二年六月に起工、十二月に竣工する記念すべき第一作である。この時、前川はレーモンド事務所に勤め始めて二年目、二七歳の若さだった。今回の指定

では、「ル・コルビュジェが示したモダニズム建築の概念を体現する、我が国初期の建物として価値が高い」と評されたが、閑静な住宅地の中に突如出現した鉄筋コンクリート造の白く輝く建物は、さぞかし清新な印象を与えたとはいえない。前川も嬉しかったのだろう。その証拠に、パリで同郷の前川と出会い、設計を依頼した理事長の木村隆三と前川がバルコニーに仲良く並ぶポストカードが、没後に所長室から発見される。誇らしげに写る前川には

確かな手応えがあったのだと思う。というのも、二〇一六年に世界文化遺産に登録される師ル・コルビュジェのサヴォア邸（一九三二年）は、厳しい建設費の制約もあり、柱と梁と床スラブは鉄筋コンクリート造だが、壁はコンクリート・ブロックにモルタルを塗る在来の工法で仕上げられていた。実は、前川のアルバムには建設中の工事写真が残されており、その実態を目撃していたのだ。一方、そのわずか一年後に竣工する木村産業研究所では、壁も鉄筋コンクリート造の真正な本物の形で造ることができたのである。

士である。」（ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳『日本美の再発見』岩波新書一九三九年）
「フランス語を話す立派な紳士」こそ、理事長の木村隆三に他ならない。ここにタウトが記した「はいから」という言葉には、どのようなニュアンスが込められていたのだろうか。その真意は、タウトが続いて高崎の実業家井上房一郎の車で訪れた長野県軽井沢町で、同じ旅日記に記した八月五日付の文章から見えてくる。

からの意味を問う手紙を差し上げた。その返書によると、(中略)施工がはいからであるという意味はよく判らないが、今考えると寒冷地への対策が充分でなかったとあり、恐縮されていた。」
こうして、木村産業研究所の遭遇した厳しい試練こそ、私たちの知る前川國男という建築家をつくり上げていく原点であったことが見えてくる。

けれども、当時の前川には見えていなかったことがあった。それは、ル・コルビュジェの方法に倣ったモダニズム建築が、雪深い厳しい気候風土に晒された時にどのようなものか、ということに対する想像力である。庇のない外壁とバルコニーは積雪によって傷み、スチール・サッシュは錆び、屋上庭園は漏水に悩まされてしまう。こうして、白く輝く建物は、自然の厳しさを前に、無残にも朽ち果てていくことになり、後年、バルコニーは撤去される。

「井上氏の『ミラテス』軽井沢店で退屈していると、突然英語で『いかがです、タウトさん!』と声をかけた人がいる、建築家のレーモンド氏だ。同氏はコルビュジェの模倣者、模写者であり、在日建築家として成功を取っている。この国の嫌らしいコルビュジェ流行は、レーモンド氏に主たる責があると言っつてよい。」（ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳『日本―タウトの日記―一九三五～六年』岩波書店一九七五年）

この時、木村理事長の甥の建物を守り続けていた木村文丸さんをご自宅に訪ね、当時の貴重な写真や資料を見見する。そして、幸いにも、『建築文化』の日本モダニズム特集号（二〇〇〇年一月号）に、「木村産業研究所という出発点」と題して紹介する機会を得る。続く二〇〇三年には、選定委員の一人としてDOMOMO百選に選ぶことができ、二〇〇五年の生誕一〇〇年前川國男展では、使われていた家具を借用した展示も実現する。そんな中、木村さんには、「重文化を目標にしよう」と勝手に願いを伝えたこともあった。残念ながら、二〇二〇年二月十六日に八五歳で亡くなられたので、喜びを分かち合うことはできなかったが、今年二〇二二年、竣工から九〇年の節目を迎えたこの建物の現在が、木村文丸さんの尽力と温かな人柄に支えられていたことを改めて書き留めておきたい。



二〇二二年にバルコニーが復元された



建物を前にした木村文丸氏
二〇〇六年五月一日撮影

おりしも、竣工から二年半が経った一九三五年五月二十七日には、弘前を訪れたドイツ人建築家のブルーノ・タウト（一八八〇～一九三八年）が、旅日記の中に、木村産業研究所の印象を次のように書き留めた。

「街角にコルビュジェ式の白亜の新しい建物を見た。これは東京の建築家の設計によるものだが、よく視ると遺憾ながら施工の点でいかにもはいからである。これが木村研究所であって、(中略) お孫さんに当る人に会うことが出来た、フランス語を話す立派な紳

「ぶしつけとは思ったが、施工がはいからである。」

整備が進む紅葉ヶ丘を再訪して

神奈川県立図書館・音楽堂 一九五四年

文・写真 松隈 洋 [神奈川県立大学建築学部教授]

二〇一三年五月一日、あいにくの休館日ではあったが、久方ぶりに、前川國男の手がけた三つの建築、神奈川県立図書館・音楽堂、青少年センター、婦人会館の建つ横浜市西区の紅葉ヶ丘に立ち寄る機会があった。前回は、二〇一六年十一月、ル・コルビュジェの国立西洋美術館の世界遺産登録を記念して企画された図書館主催の「図書館建築の歴史と未来を語り合う」と題する講演会に招かれた際だったので、七年ぶりとなる。当日は、戦後図

書館の歴史について筆者が概説した後、図書館を中心とする新しい形の複合文化施設を実現させ、この年の日本建築学会作品賞を受賞した武蔵野ブレイス（二〇一一年）の設計者の川原田康子、比嘉武彦両氏との鼎談や、図書館と青少年センターの見学会など、盛りだくさんの内容となった。また、この日に間に合うように、と依頼されて、研究室の大学院生たちが制作したイラスト入りのパンフレット「知れば知るほど好きになる！神奈川県立

東側の前庭から見る音楽堂(右)と図書館



北西側の掃部山公園から見る音楽堂(左)と図書館



立図書館」には、設計趣旨と見どころ、そして、前川の下で設計を担当した鬼頭梓の「みんなに開かれた図書館は民主主義そのものを意味すると思うんだ」という言葉が紹介された。この講演会の終了後、音楽堂の空調設備の改修と外構や庭の整備など、機能性を向上させつつ、より当初の姿に近づけるための大がかりな改善工事が施されていく。また、図書館は、二〇一六年に県の教育委員会が策定した再整備の方針により、新棟の本館が隣地に建設されて二〇二二年に開館し、旧館は、「前川國男館」としての活用が図られることになる。現在は、二〇二六年の開館を目指して実施設計が進行中だ。そして、これらの計画を踏まえての措置なのだろう。二〇二一年、音楽堂と図書館の建物全体が、晴れて神奈川県的重要文化財に指定されたのである。

今回、現地を訪れると、すっきりと整えられた前庭や奥庭により、竣工当時のような内外空間の伸びやかな広がりや涼とした心地良い緊張感を漂わせており、よくここまで辿り着いたな、との感慨を抱いた。同時に、この建物の保存運動に尽力した人たちの姿が思い出されてならなかった。そこで、前川事務所に在籍していた筆者が目撃した、一九九〇年代の音楽堂が遭遇した危機の顛末を書き留めておきたい。

しを前提とする基本構想策定委員会（團伊玖磨委員長）が発足し、それに合わせて一九九三年一月にまとめられた「音楽堂の歴史的评价に関する報告書」の結論部分は、「死してより新しく優れた命を生み出す」、「音楽堂の死は、日本文化がさらなる発展を試みる一石でありたい」と結ばれていた。この時、音楽堂は竣工から四〇年足らずであり、一九八六年に前川國男が没してからわずか数年後にこのような計画が浮上するとは思わず、その衝撃は大きかった。おろしも同じく神奈川県の後復興の象徴として一九五一年に建てられた坂倉準三の神奈川県立近代美術館も存続が取り沙汰され始めていた。そのため、一九九四年二月、音楽堂を愛する音楽家や市民、建築関係者の有志が強い危機感を抱いて急ぎよ結成したのが、「神奈川県立図書館・音楽堂と近代美術館を考える会」だった。この時、建築家として保存運動の中心になっていったのが、林昭男、野沢正光、黒木実の三氏であり、事務局は黒木氏の事務所に置かれ、会合は林氏の古巣の第一工房で夜な夜な重ねられていく。「考える会」の活動は、署名運動や保存要望書の提出に留まらなかった。

その野沢正光さんが、四月二十七日に急逝された。最新の仕事は、師・大高正人の全日本海員組合本部会館（一九六四年）の保存改修であり、昨年十二月十八日、着工前の見学会とドコモモ選定プレート贈呈式にリモートで発言されたのが公的な場での最後の姿となった。自立した建築家としての矜持と先人たちへの敬意を忘れたかった野沢さんが偲ばれてならない。謹んでご冥福をお祈りしたい。

九四年五月十七日、音楽堂そのものを会場に、「神奈川県立音楽堂を見聞き、語る集い」と題する催しを実施させる。それは、設計担当者の一入の進来麻氏が案内役を務める見学会とシンポジウム、そしてコンサートにより音の響きを楽しんで音楽堂の価値を共有しようというユニークな三部構成だった。コンサートでは、横浜在住のピアニストの山岡優子

（フェリス女子大学教授）氏の呼びかけにより、朝倉蒼生（ソプラノ）、芳野靖夫（バリトン）、水野佐知香（バイオリン）、長谷川陽子（チェロ）ら音楽家による多彩な演奏も行われ、最後は、延べ四時間に及んだこの集いに参加した七五〇人全員の合唱で締めくくられた。取り壊しの危機という崖っぷちの逆風の中で、音楽堂に心を寄せる人たちの思いが結実した感動的な光景だった。

一九九〇年九月、未曾有のバブル経済の勢いを背景に発案されたに違いない。神奈川県は、「かながわ文化施設二世紀構想」を策定し、「紅葉ヶ丘文化ゾーン」の総合的再編整備の推進」を表明する。これを受けて、一九九二年十月には、音楽堂の取り壊

この野沢正光さんが、四月二十七日に急逝された。最新の仕事は、師・大高正人の全日本海員組合本部会館（一九六四年）の保存改修であり、昨年十二月十八日、着工前の見学会とドコモモ選定プレート贈呈式にリモートで発言されたのが公的な場での最後の姿となった。自立した建築家としての矜持と先人たちへの敬意を忘れたかった野沢さんが偲ばれてならない。謹んでご冥福をお祈りしたい。

この野沢正光さんが、四月二十七日に急逝された。最新の仕事は、師・大高正人の全日本海員組合本部会館（一九六四年）の保存改修であり、昨年十二月十八日、着工前の見学会とドコモモ選定プレート贈呈式にリモートで発言されたのが公的な場での最後の姿となった。自立した建築家としての矜持と先人たちへの敬意を忘れたかった野沢さんが偲ばれてならない。謹んでご冥福をお祈りしたい。

鬼頭梓の図書館建築の出発点

東京経済大学図書館 一九六八年

文・写真 松隈洋〔神奈川大学建築学部教授〕

二〇二三年三月から六月まで、京都市芸繊維大学の美術工芸資料館で、「建築家・鬼頭梓の切り拓いた戦後図書館の地平」と題する建築展が催された。同時開催の「村野藤吾と長谷川堯―その交友と対話の軌跡―展と共に、筆者にとって、二三年間の在任中に手がけた最後の展覧会となった。なぜ今、鬼頭の「戦後図書館」なのか。図録にも記したが、ここでは、私事を交えつつ、開催までの経緯と主旨を書き留めておきたい。

中二階から一階の閲覧室を見下ろす



一九九三年、鬼頭が設計に携わった前川國男の神奈川県立図書館・音楽堂（一九五四年）が、再整備計画により取り壊しの危機に陥る。その最中に行われた誌上座談会で、建築家協会会長という難しい立場ながらも、当時は振り返り、音楽堂が戦後の解放感と未来への希望の中で生み出されたと語る鬼頭の姿に接する（『建築ジャーナル』一九九三年八月号）。続く一九九八年には、彼の建築を各地に訪ねて批評する機会を与えられ、

地下二階の陰影のある第二閲覧室



戦後図書館を切り拓いた仕事を知り感銘を覚える（松隈洋「路地と広場と空間―鬼頭梓の建築が求めたこと」『NAX REPORT』一三六号、内井昭蔵監修『モダニズム建築の軌跡』NAX出版二〇〇〇年所収）。

そうした経験から、大学着任後の二〇〇二年、大阪の建築専門書店の柳々堂の協力により企画監修した「近代建築を旅する」と題する連続講演会に鬼頭を招き、「図書館建築に託したもの」というテーマで講演を依頼したのである（『アーキフォーラム・ノート』『住宅建築』二〇〇二年九月号、二〇〇三年九月号）。実は、その打合せの際、鬼頭から事務所閉鎖に伴い設計原図を廃棄せざるを得ないとの話を聞く。二〇一三年の文化庁国立近現代建築資料館設立前のことだった。そこで、筆者から依頼して、二〇〇三年、東京理科大学山名善之研究室が緊急避難の形で図面を預かり、一次整理が進められていく。そして、鬼頭没後の二〇〇九年、日本建築家協会の協力で二〇〇七年に設立された金沢工業大学 J-A-K-I 建築アーカイヴスに、遺族からの寄贈により収蔵される。このような経緯と、関係者と学生の尽力によって、遺された貴重な建築資料を元に、鬼頭の図書館建築を紹介するはじめての展覧会が実現できたのである。

ところで、二〇二三年は、鬼頭の手がけた日野市立中央図書館と山口県立図書館の竣工から五〇年という節目の年にあたる。その間、全国各地に数多くの公共図書館が建設された。統計資料によれば、二〇二二年、その総数は当時の三倍以上の三千三百五館に増え、自治体別の設置率を見

ると、都道府県立一〇〇%、市区立九九%に達した。少なくとも、現代は、ほぼすべての県や市に図書館が存在する時代となった。けれども、町村立の設置率は五八%という低い水準にとどまるという。また、それ以上に気がかりなのは、全国各地で書店が激減していることであり、二〇二二年には、書店がひとつもない市区町村が二六・二%にも上った。それは、同じ国に住んでいるにもかかわらず、本を手に取り、本の世界に触れる情報環境を持たない人が国民の一〇四以上いることを意味する。そして、

そのような貧弱な情報環境によって、もともとも影響を受けるのが子供たちではないだろうか。それは、「すべて国民は、健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する」と謳われた日本国憲法第二五条に抵触する社会問題であり、改めて公共図書館の歴史と存在意味が問われ始めている。こうした中で、鬼頭梓の仕事を通して、公共図書館の意味を再確認する機会にしたいと思ったのである。

さて、ここに掲載する写真は、一九九八年、鬼頭の図書館建築の出発点となった東京経済大学図書館を初めて訪ねた際のものである。この時、何よりも新鮮に感じたのは、一辺四〇m 角の正方形プランの大屋根の下に広がる柱のない大空間の一階の開架閲覧室と、地下二階の第二閲覧室との、空間のスケール感と明るさの対比的な印象の違いだった。一人静かに本と向き合う学生の姿が神々しく見えた。しかも、その対比は、敷地の高低差を巧みに利用したさりげない方法によって実現されていた。前川の下で国立国会図書館と神奈川立図書館

を担当した実績を評価されて、幸運にも、大学との信頼関係に基づく恵まれた条件の下で設計を依頼された鬼頭にとって、独立後、最初に手がけたこの図書館は、文字通り、その後続く図書館建築の出発点となる。しかも、そこには、後年に次のように記すとおり、すでに最初の時点から、図書館建築に求めた鬼頭の空間哲学と呼べるものがあつたのだと思う。

「私は平ら床に集約される新しい図書館建築の諸原則に強く共鳴している。そして同時に一人で静かに本を読む場所、というイメージにも固執している。（中略）何故なら、一人で静かに本を読む、というイメージは、実は本の持つ本質そのものに深く根ざしているからなのである。図書館は皆のものであり、本の場所であり、そして一人の場所でもある。そんな空間を創りたいと思う。」（『新しい図書館の建築』『現代詩手帖』一九八一年十一月号）

ここに簡潔に記された「私一人の場所」としての図書館の在り方に対する眼差しこそ、東京経済大学の地階の閲覧室に、禅寺のような暗がりに包まれた骨太で簡素な空間と、その下に設けられた大きな閲覧机の形を生み出す原動力だったに違いない。残念ながら、二〇一四年、新図書館の建設に伴う大倉喜八郎進一層館への改修によって、そのたまたまは失われてしまったが、人間にとって本とはどのような存在なのか、そして、図書館に何が求められるのか。そのことを考えるためにも、ここを起点に始まる鬼頭の図書館建築の原風景を、今一度記憶しておきたい。